

# 目 次

序 章	1
0.1 研究目的	1
0.2 因果関係を表す接続表現の日中対照研究の意義	2
0.3 本研究の課題	5
0.4 日本語教育における因果関係を表す接続表現の日中対照研究の意義	9
0.4.1 接続表現の種類と因果関係の度合いとの関連性への理解	9
0.4.2 接続表現の機能および因果関係を表す複文への認識	10
0.4.3 接続表現の使用と構文要素との関わりへの理解	11
0.4.4 接続表現の機能と原因節の展開との関係	12
0.5 研究対象	13
0.5.1 日本語の場合	13
0.5.2 中国語の場合	14
0.6 調査資料および調査分析方法	14
0.7 研究内容および研究方法	16
0.8 本研究に使用する主要な用語の概念	20
注	23
第1章 先行研究および本研究の立場	24
1.1 日本語の条件文と中国語の“主従複文”の分類	24
1.1.1 日本語の条件文の分類	24
1.1.2 中国語の「主従複文」の分類	25
1.2 日本語の因果関係を表す接続表現に関する従来の研究	26
1.2.1 「から」と「ので」の相違に関する従来の研究	27
1.2.2 「ため(に)」と「から、ので」との相違に関する先行研究	31
1.2.3 「て」と「から、ので、ため(に)」との相違に関する先行研究	33
1.3 中国語の「因果複文」に関する従来の研究	36
1.3.1 主要な先行研究における「因果複文」についての分類	36
1.3.2 現在の「因果複文」の研究における代表的な観点	38
1.3.3 “关联词语”の範囲、複文の「標識分類」及び「意合複文」の定義	40
1.3.3.1 “关联词语”の範囲	40
1.3.3.2 複文の「標識分類」及び「意合複文」の定義	41
1.4 本研究の位置づけ	42
注	45
第2章 接続表現の表現類型と因果関係の度合いとの関わり	47

2.1	因果関係を表す複文における両言語接続形式の種類	47
2.1.1	日本語の接続形式の種類	47
2.1.2	中国語の接続形式の種類	48
2.2	日本語における接続形式の種類と因果関係の度合いとの関わり	51
2.2.1	接続形式の種類についての細分類	51
2.2.2	接続形式の種類による因果関係の度合いの相違	53
2.2.2.1	原因・理由を強調する要素が含まれていない場合	53
2.2.2.2	原因・理由を強調する要素が含まれている場合	54
2.2.2.3	構文順序による原因・理由を強調する場合	55
2.3	中国語における接続形式の種類と因果関係の度合いとの関わり	56
2.3.1	接続形式の種類とその働きについて	56
2.3.2	接続形式の種類による因果関係の度合いの相違	59
2.3.2.1	接続表現を使用しない“P、Q”型	60
2.3.2.2	主節のみに接続表現が単数使用される場合	61
2.3.2.3	従属節のみに接続表現が使用される場合	62
2.3.2.4	従属節と主節ともに接続表現が使用される場合	63
2.3.2.5	結果から原因をたどる構文の場合	65
2.4	因果関係の度合いによる日中両語の対応関係	66
2.5	まとめ	69
注		72
第3章	接続表現の機能および使用範囲の異同	73
3.1	因果関係を表す複文の分類	73
3.1.1	日本語の因果関係を表す複文の分類	73
3.1.2	中国語の因果関係を表す複文の分類	75
3.2	「単なる原因・理由」を表す文について	76
3.2.1	事態原因を表す文	77
3.2.2	ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文	80
3.2.3	時間的な継起関係を伴う行為の理由文	83
3.2.4	自然現象変化と状態変化の原因文	87
3.2.5	感情表明の原因・理由文	91
3.2.6	感情評価の原因・理由文	94
3.2.7	心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	97
3.2.8	説明的な原因・理由文	100
3.2.9	まとめ	102
3.3	推量・判断の根拠を表す文	103
3.3.1	原因を根拠に結果を推量判断するもの	103

3.3.2	結果を根拠に原因を推量判断するもの	106
3.3.3	まとめ	109
3.4	発言・態度の根拠を表す文	110
3.5	両言語の接続表現の機能および使用範囲の異同	113
3.5.1	両言語の接続表現の機能の異同	113
3.5.2	両言語の接続表現の使用範囲の異同	115
注		117
<b>第4章</b>	<b>原因節の焦点化における両言語の異同</b>	<b>118</b>
4.1	焦点の定義	118
4.2	焦点の分類および表現形式	119
4.2.1	焦点の分類	119
4.2.2	焦点の表現形式	120
4.3	原因節焦点化の表現形式	121
4.3.1	日本語における原因節焦点化の表現形式	121
4.3.2	中国語における原因節焦点化の表現形式	123
4.4	原因節の焦点化における日中両語の対応性	125
4.4.1	主節の「のだ」による原因節焦点化の場合	126
4.4.2	構文の順序による原因節焦点化の場合	129
4.5	焦点の諸相	131
4.5.1	原因節が疑問のフォーカスである場合	131
4.5.2	原因節が推量・判断のフォーカスである場合	133
4.6	まとめ	135
注		138
<b>第5章</b>	<b>接続表現の使用と主語、述語動詞との関わり</b>	<b>139</b>
5.1	主語、述語動詞による構文パターンの想定	139
5.2	同一主語による構文	140
5.2.1	「SV <sub>1</sub> 、SV <sub>1</sub> 」構文パターン	140
5.2.2	「SV <sub>2</sub> 、SV <sub>1</sub> 」構文パターン	145
5.2.3	「SV <sub>1</sub> 、SV <sub>2</sub> 」構文パターン	150
5.2.4	「SV <sub>2</sub> 、SV <sub>2</sub> 」構文パターン	154
5.3	異主語による構文	156
5.3.1	「S <sub>1</sub> V <sub>1</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>1</sub> 」構文パターン	156
5.3.2	「S <sub>1</sub> V <sub>2</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>1</sub> 」構文パターン	161
5.3.3	「S <sub>1</sub> V <sub>1</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>2</sub> 」構文パターン	166
5.3.4	「S <sub>1</sub> V <sub>2</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>2</sub> 」構文パターン	169

5.4	まとめ	172
	注	176
<b>第6章</b>	<b>因果関係を表す複文における接続表現の使用と時間表現との関わり</b>	<b>177</b>
6.1	先行研究および研究方法	177
6.1.1	日本語の先行研究について	177
6.1.2	中国語の先行研究について	180
6.2	日本語の接続表現の使用と時制との関わり	181
6.2.1	「Pタ⇒Qタ」型	182
6.2.2	「Pル⇒Qタ」型	185
6.2.3	「Pル⇒Qル」型	188
6.2.4	「Pタ⇒Qル」型	190
6.3	中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わり	191
6.3.1	中国語のアスペクトの表現形式および分類	191
6.3.1.1	アスペクトの表現形式	191
6.3.1.2	アスペクトの分類	192
6.3.2	4つの分類における接続表現の使用とアスペクトとの関わり	193
6.3.2.1	“P已然⇒Q已然”型	193
6.3.2.2	“P已然⇒Q未然”型	195
6.3.2.3	“P未然⇒Q已然”型	197
6.3.2.4	“P未然⇒Q未然”型	198
6.4	まとめ	199
	注	202
<b>第7章</b>	<b>因果関係を表す複文における構造モデル</b>	<b>203</b>
7.1	日本語の構文モデル	204
7.1.1	順行型構文モデル	204
7.1.1.1	「P→Q」型と「P <sub>1</sub> 、P <sub>2</sub> ……→Q」型	204
7.1.1.2	重層型 { (P <sub>1</sub> → Q <sub>1</sub> ) = P <sub>2</sub> } → Q <sub>2</sub>	207
7.1.2	逆行型構文モデル	210
7.1.2.1	「Q←P」型と「Q←P <sub>1</sub> 、P <sub>2</sub> ……」型	210
7.1.2.2	逆行重層型「Q <sub>2</sub> ←{ (P <sub>1</sub> →Q <sub>1</sub> ) = P <sub>2</sub> }」型	212
7.1.2.3	「Q。←P」型	213
7.1.2.4	「Q、←P <sub>1</sub> (否定) P <sub>2</sub> (肯定)」型および「Q、←P (否定)」型	214
7.2	中国語の類型モデル	215
7.2.1	順行型構文モデル	216
7.2.1.1	“P→Q”型と“P <sub>1</sub> 、P <sub>2</sub> 、……→Q”型	216

7.2.1.2 重層型モデル $\{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \} \rightarrow Q_2$ -----	221
7.2.2 逆行型構文モデル-----	223
7.2.2.1 “ $Q \leftarrow P$ ”型と“ $Q \leftarrow P_1, P_2 \dots$ ”型-----	223
7.2.2.2 逆行重層型 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$ -----	226
7.2.2.3 “ $Q, \leftarrow P_1$ (否定) $P_2$ (肯定)”型および“ $Q, \leftarrow P_1$ (否定)”型-----	227
7.2.3 変形型-----	228
7.2.3.1 変形型① “ $P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$ ”-----	228
7.2.3.2 変形型② “ $Q_1 \leftarrow P \rightarrow Q_2$ ”-----	230
7.3 構文モデルにおける日中両言語の異同-----	232
7.3.1 「順行型」構文モデルにおける日中両言語の異同-----	232
7.3.2 「逆行型」構文モデルにおける日中両言語の異同-----	235
7.3.3 「変形型」構文モデルにおける日中両言語の異同-----	237
注-----	238
<b>第8章 日本語教育への応用</b> -----	<b>240</b>
8.1 課題提起-----	240
8.2 因果関係を表す複文における習得上の難点-----	241
8.2.1 因果関係を表す複文に関する認識の違いと接続表現の脱落との関連性-----	242
8.2.2 接続表現の機能への理解-----	244
8.2.3 接続表現の使用と諸構文要素との関わりへの理解-----	245
8.2.4 複数原因節における接続表現の使用と接続表現の機能への理解-----	249
8.3 教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方-----	252
8.4 教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方の問題点-----	255
8.4.1 接続表現の提出順序への考慮の問題点-----	256
8.4.2 接続表現の意味機能に関する認識の違い-----	257
8.4.3 用例の偏りと他言語との対応関係への認識の違い-----	258
8.4.4 接続表現と構文諸要素との関連性への認識の不足-----	260
8.4.5 複数の原因節における接続表現の使用への認識の違い-----	262
8.5 日本語教育への提案-----	264
8.5.1 教科書、解説書作りと学習者の母語への考慮の重要性-----	264
8.5.2 日本語教育現場における他言語に関する知識の必要性-----	266
注-----	268
<b>第9章 結びと今後の課題</b> -----	<b>269</b>
9.1 本研究のまとめ-----	269
9.2 結論-----	272
9.2.1 因果関係を表す複文に関する認識の違い-----	272

9.2.2	接続表現の使用上の制約-----	275
9.2.3	接続表現の機能的な異同-----	276
9.2.4	因果関係を表す複文におけるマーカ-の多様化、自由化の相違-----	277
9.3	今後の課題-----	278
	<b>用例出典</b> -----	280
	<b>参考文献</b> -----	283